
小説モンスター

深音 雲陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小説モンスター

【Nコード】

N0559X

【作者名】

深音 雲陽

【あらすじ】

さえないライトノベル作家、鳶村利賢。

彼が作家人生の締めくくりにと書き上げた小説。

それが思わぬ形で大ヒットし、彼の人生は上昇していく。

しかし、そんなある日、ふとテレビに映った光景は

。

序幕（前書き）

初投稿です。

素人が頑張って書いているだけです。面白くない可能性が非常に高いです。

また、新しい話がなかなかできないこともあります。

ジャンルはSFですが、違和感を覚えるかもしれません。

これらのことを理解してお読みください。

序幕

私の名前は『しまむらりけん 寫村利賢』。

世間では『おかもとけんいち 岡本健一』という名で有名だ。

というのも私はライトノベル作家で、岡本健一はペンネームである。

当初、本名がかなりめずらしい名だと思ったので自分の名前をペンネームにしようとした。

だが、友人や身内に知られなくなかったので結局『岡本健一』にすることに。

今はこの名前をなかなか気に入っている。理由は特にないが。結果的に友人や身内には知られていないようなのでよかったとは思っている。

私が現在執筆している『日本近未来史』。SFとミステリーを融合させた作品で、なんとバカ売れしている。

この本のあらすじは、おおまかに述べると『一人の主人公とその仲間たちが近未来の日本に出現した犯罪組織に立ち向かう』、という単純なもの。

自分でもこんなに売れるとは思っていなかった。

私は推理小説が好きなので、その趣味を全開に出して書いた本なのだが、世間にはこれがウケたらしい。

過去に何冊か小説を書いてはいたのだが、どれも売れた、とはいえない難しいもの。

すべて私のもてる力を総動員し、真剣に書き上げたのだが、売れなかった。

もう27歳になるので、そろそろ「売れなければ小説家をやめちゃんとした職につこう」と思い、最後に自分の好きなように物語を書いてやめよう、と心に決めたのだった。

それだけに、今回の小説が売れたのは正直、複雑な気持ちだ。

まあ、堅苦しい文章より、わかりやすく読みやすい文章のほうが受け入れられやすいからなのだろう。

ただ、好きなことを続けられるのは不幸中（？）の幸いである。

「先生、どうしたんですか」

突然声をかけられる。そうだ。私は今仕事だった。

「なんでもないよ。ちよつと疲れただけさ」

軽く返事をする。

今の声の主は『天井輝行』^{あまいしるゆき}。小説の挿絵を描いてくれている。

彼はなんと16歳。世間から『天才高校生イラストレーター』と

呼ばれ、私以外の作品も担当していると聞いている。仕事では『S

WEET』という名前だ。

画力は確かで、描くスピードも速い。私の小説が売れたのも彼の力が背景にあるからだと思っている。

彼は普段私のことを「先生」と呼び、私は彼のことを「天ちゃん」と呼んでいる。

余談だが、私も執筆速度が速いほうなので、彼にはけっこう負担をかけてしまっている。だが、それでも彼は私の要求に忠実に応えてくれる。

さつきはたぶん、いつもは執筆の手が止まらない私がぼーっとしていたのを不思議に思ったからだろう。

彼は本当にまじめで、思いやりのある青年だ。とても高校生とは思えない。驚異的なほどに。

私にとってこんなに心強いサポートはないと言ってもいい。

さらに、担当者も『野村三司』^{のむらみさし}さんという、DG文庫^{デジタルブック}でも有名な作家を多数輩出している担当。ちなみにDG文庫とは、有名な出版社のひとつで、私の本を出版してくれているところだ。

こんなふうに私の周りはとても恵まれている。これは本当に運がよかったと言えよう。

とにかく、周りの人の多大な力で私が売れたことをわかっていただけだろうか。

いかんいかん、仕事に戻らねば。今日の予定は…っと。
午前中は天ちゃんとともに執筆。午後からは大峰書店でサイン会だ。

基本、執筆作業はひとりでおこなっているのだが、今日は無理を承知で特別に仕事をさせてもらっている。どうしても天ちゃんと描きたいシーンがあつたからだ。

今は主人公が新たな犯罪組織に立ち向かっていくシーンを書いている。

すると突然、張りつめた空気の中で間の抜けた音が響く。

「すみません、お腹鳴っちゃいました」

天ちゃんが照れながら笑う。

「今日の朝食が早かったもので……少しお腹がすいてしまつて」

「いや、いいんだ。無理を言っているのはこっちだから」

彼は彼なりに忙しいのだろう。今日は9時から来てもらっていたのだが、どうやら別の仕事が入っていたらしい。

時計の針を見ると11時をすこし過ぎたころだ。

「大丈夫か？なんだったら早めに食事を」

「大丈夫です。予定通り進めてください」

「そ、そうか」

あまりの即答に気後れしてしまう。

本当に彼は真面目だ。

「あんまり根つめすぎて体壊さないようにな」

私からの最低限の気配り。

「わかつてますよ」

天ちゃんはそう返すと、黙々と仕事を続けはじめた。

こういうところは私も見習わなければならぬ。いや、見習うところしかないだろうな……。

さて、もうひと踏ん張りと行きますか。

私は再びパソコンに向かい、自分の思う通りに文字を踊らせた。

第一幕（1）（前書き）

仕事が終わりに、後輩「天井輝行」とともにラーメンを食べに行く利賢。

その先に待っていたものは

？

第一幕(1)

12時を過ぎ、天ちゃんあまと昼飯を食べに行くことになった。

私は天ちゃんに希望を聞いたのだが、「安いラーメンでいいです」とこれでもかというくらいに謙虚だった。それとも高校生はこういう食べ物の方がいいのだろうか？

私としては回らない寿司屋で好きなだけ食べさせるぐらいの余裕をもっていた。

なので、少し肩すかしを食らったような感じになってしまっ。

まあでも本人の希望通りにやってやらないと後で何を言われるかわからない。

パソコンの電源を切り、机の上をひととおり片づける。

「それじゃ行こうか」

「はい」

天ちゃんが鼻歌まじりに応える。

「やけにうれしそうだな」

「そ、そんなことありませんよ！さ、早く行きましょう！」

まじめなうえに素直だ。この子はウソをついたこともないんだろ
うな。

まるでこの高校生が優しい神父さんのように見えた。

玄関から出ると、さわやかな初夏の風がほおをなせる。

照りつける日差しが心地よく、小鳥のさえずりでも聞こえてくる
ような気がした。

心地よさの中で、こんなことできなかったな、と過去を振り返る。

小説『日本近未来史』が売れたことはかなり私の生活を変えた。

なんといつても、収入が増えたのはうれしいかぎりである。

今では後輩に飯を奢ることもたやすくできる（あまりいいのだが）。

前は自分が三食きつちりと食べられていたかどうかも怪しいとこ

る。

一気に生活水準がアップしたのである。

しかし、あまり贅沢はしていないもの、車や家を一度に購入したのでたくさん持っているわけではなかった。

一応言っておくが、別にギリギリなわけではない。単に使いすぎたせいだ。

というかさわやかな雰囲気の中でこんな思考をしてしまう自分に苦笑してしまう。

「窓開けていいか？」

車に乗り込んだ天ちゃんに向かってたずねる。

「かまいませんよ」

返事はイエスで返ってくる。聞くまでもないことかもしれないが、一応聞いておかないと失礼だろう。

ちなみに窓を開けたのは、外の空気を味わえるときに味わいたいからである。

もともとインドア派の私。職業柄、室内にいたことがほとんどなこともあり余計に外に出ないのだ。

「じゃ、車出さずぞ」

私はそう言っつて、街へと車を走らせた。

その先にどんな痛快な作り話よりも滑稽な真実が待ち受けているのかも知らずに

私が貧乏だったころの話の少し。

これから私が話すその店の名は『来名亭』らいめいてい。

高校生のころからよくお世話になっている店で、美味くて激安と

いう評判で有名。テレビの取材も何度か来ているようだった。

ちなみにラーメンの値段は並の大きさを390円。大盛りでも450円という驚きの安さ。

その当時、親と離れて暮らしていたためお金のなかった私は毎日のように通いつめた。

すっかり常連になってしまい、親父さんとも長い付き合いになる。

この店も開店から30年がたつという。

昔16だった私は27になり、44だった親父さんも55。

時間が流れるにつれ、私は成長した。小説家として。

でもそれは親父さんにとつての衰退だった。

近くに大きなデパートができ、客足をとられてしまったのだという。

昔ながらの常連も私しかいなくなってしまったのことだ。

とはいえ、確かに昔の輝きこそないが、安くて美味しいのは相変わらず。

私が稼ぐようになっても、いつまでも通い続けるのはこれが理由。親父さんは「いつまでこんな店に来てるんだい」なんていうのだが、私は決まってこう答えるのだ。ラーメンの値段が上がったら、です。と。

私は安くて美味しいものが好きなのだ。それも小説を書くのと同じくらいに。

「いらっしゃい！」

昔と変わらない声。シワは増え、髪の毛も少し薄くなったりしているけど。

店内も年季の入ったものになって暗い店内だけだ。

私の小説家としての活力の源。あの人の明るい笑顔、時に厳しく、優しい言葉。

青春時代、悩みを相談して、我が子のように心配してくれた親父さん。

変わってほしくないもの、変えたくないものってこういうことな

んだな、と思う。

「ラーメン2つ。大盛りで！」

「え？いいですよそんな」

「問題ない。激安だからな」

まあ最近は大盛りラーメンなんて800円以上するものがほとんどになってしまっているから、天ちゃんが遠慮するのも無理はない。

「了解！…おや？そいつは後輩かい？」

「まあ、そんなところですよ」

厳密にいうと違うのだが。

「初めまして」

「おう！利賢の後輩なら大歓迎だ。ほらよ」

目の前に大盛りのラーメンが2つ並ぶ。

「いただきます！」

いつもより早くできたラーメンを、おなががすいていた私と天ちゃんはずぐに食べ始めた。

「おいしいです、親父さん」

天ちゃんが感想を口にする。当然だ。美味くなくて私が通いつめるはずがない。

「ありがとよ。…でもよ、やっぱり寂しいな」

「なにがです？」

思わず聞き返してしまった。

「…いや、なんでもねえ。ちよつと昔を思い出してしまっただけさへへっ、と照れ臭そうに笑う親父さん。らしくないな…」

もしかしたら、天ちゃんもいて少しにぎやかなころの雰囲気を感じたからだろうか。

「大丈夫ですよ。私は天国とか地獄でも通いつめますから」

「そうか。それは心強いな！」

ようやく大きく笑ってくれた。

「まったく、お前は相変わらずだな。もっといい店を
ふと、親父さんが突然笑うのをやめた。」

「どうしたんですか？」

「おい……テレビ、見てみるよ……」

「え？」

促されるまま、テレビの画面に目を向ける。

速報です。テロが発生しました。東京都の港区で……

はつきりとしやべっているはずのニュースキャスターの声が聞こえず、口から言葉も出なかった。

「先輩……これって……」

天ちゃんの声にハツとする。もう一度画面を見つめなおしてみるのが、やはり。

「俺の小説に出てくるテロ組織とそっくりだ……」

思わず『俺』と言ってしまった。

だが、エンブレムも、服装も、武器も。攻撃手段だって、目標物だって。すべてがまったく同じ。

「そんな……なぜだ……」

紡ぐ言葉が出てこない。まさか。単なる偶然だろ。きっと同じ考えをもった奴だっているさ。こんなことがあっていいはずが……。

いくら思考回路を巡らせても冷静になることができなかった。

悪感。閉塞感。倦怠感。無力感。危機感。絶望感。罪恶感。責任感。使命感。

気づけば、店を飛び出していた。

第一幕(1)(後書き)

また下手な文章ですいません。

ちよっとした戯言として受け取っていただければ…。

第一幕(2)(前書き)

駆け出した利賢。

彼の行く末には何があったのか？

第一幕(2)

私は走った。店の前に止めた車を使うことなんか忘れて、無我夢中に走る。

そうでもしないと、自分を保っていられなかった。

周囲の好奇心な目など、気にならない。ただ、現場がどうなっているのかを知りたい。テレビでなく、この手で。

ニユースで見たのはあの場面だ……。最初に狙った場所……！

芝浦ふ頭駅。店からはそう遠くない距離だが、普段の私ではきつと走りきれない距離だろう。

おそらく5キロ以上はある。何でもない距離と思うだろうが、中学、高校と野球をしていた私も当時から10年近く経ってしまっており、走り出してすぐに息切れする有様だ。体力低下は否めない。

遠くから、救急車や消防車のサイレンがこだまする。

もはやフルマラソンを2回も走ったような気分だ。

だが、自分の中から湧き出てくる？何か？が私を突き動かす。

コンクリートが私の一步に、小気味悪い音をたてる。

さっきまで晴れていた空が、今にも泣きだしそうだった。

どれぐらい走っただろうか。

足はとっくに悲鳴を上げ、呼吸をするのがいっばいのはずの体。

ラストスパートと言わんばかりに自分の体に鞭を打ち、走る。

ふと、ひたすら走っている私の心にあるひとつの疑念が生まれた。
なぜ、走っているんだ。

本当は、最初から思っていたのだろう。しかし、なぜかそう思いたくなかった。

自分という一般人（有名人かもしれないが）、本物の、現実世界のテロ集団に太刀打ちできるのか？

いや、できない。なにせ、もとよりそんなつもりはないからだ。

自分の誤解を正しに行く。それだけだ。

だが、まったく不思議なものだ。こんな状況なのに、私は考えることができる。

昔から、何に關しても考えることをやめない性格だった。

中学校時代には、当時の好きな人に「頭かたいね」といわれすくしょックを受けたこともあったか。

そのときは直そうと努めたのだが、直らなかったようだ。

「ごちゃごちゃと考えているうちに、警察の規制に遭遇する。

ここからでは、現場の様子はわからない。私はいら立ったが、そりゃそうだ。テロリストがいる現場に、一般人を立ち入らせることはできない。

そう考えると、自分の顔から血の気が引いていくのを感じた。

まだテロリストが近くにいてもかもしれないじゃないか…！

突如こみ上げる恐怖。今までまったく考えていなかった。

足がすくむ。周りの全てが自分をあざ笑っているかのようだ。

しかし、真実を確かめたいという気持ちは変わらない。

辺りを走り回り、現場の見れそうな建物を探す。

近くにはたくさんビルがあるのだが、いざこれというのがわからない。

昔は都会のビル群に憧れたものだったが、今は鬱陶しくて仕方ない。

どうしてこうもビルが多いんだ、とぼやきつつ、結局目のついたビルの屋上へ。

なぜかエレベーターを使うのが億劫で、古びた螺旋階段を駆け上がる。

何かから逃れるように、必死で、必死で。

一段一段が足に絡みつくようで、前に進んでいる気がしない。体からはかききれないほど汗が吹き出していた。

もはや耳に聞こえるのは自分の荒い息と乱暴に階段をとらえる足音だけ。

屋上が近づいてきたのか、外の空気を肌を感じる。ほんのり雨の香りもする。

光が見えた。勢いよく外へ飛び出す。

すぐさま現場の方向を凝視する。あの辺りにもビルが多いため、はつきりと見えるわけではないが、なんとなく様子がわかってきた。だが、それと同時に頭を殴られたようなショックを受ける。思わず小さな悲鳴をあげてしまった。

私が見た限り、ターゲットの駅周辺は、小説通りに、まるでドラマで再現したかのような完璧な光景。

私が事細かに表現した、あの光景。私の描いた光景そのもの。
「すげえ……」

あまりの完璧な再現に少しの感動すら覚えてしまった。

爆破される対象、爆破の具合、逃げ惑う人々の動き、あれは自衛隊だろうか、迷彩服に身を包んだ集団が現場へと向かっ

ている様子がかげえる。

私は、不謹慎な感情を抱いてしまう。

この光景を見て、普通の人なら何を思い、考え、感じるだろうか。恐怖？怒り？？それとも憤慨？はたまた憎悪？？

私は、？喜び？を感じた。

さっきまでであった正義はどこへ、テロ集団を倒す目的は消え失せ、ただ不謹慎な気持ちが膨れ上がる。

この私が書いた小説に、ここまで馬鹿に、完璧に、そして美しく、言葉に表せない気持ちがあるだろうか。伝えたくても伝えられない、伝えにくい気持ち。

ここへ来て、ようやく私の小説は世間に広まっていることを実感する。

だから、嬉しかった。悲しまなければいけない大事件なのだろうが。

知らぬ間に、私は涙を流していた……？

呆然と立ち尽くしていたらしい俺は、どうやら後を追ってきていた天ちゃんあまに声をかけられ我に返る。

「先輩……！探しましたよ……」

私が正気を取り戻したときには、土砂降りの雨が降っていた。さ

きほどの涙も、雨だったのか、涙だったのか、なんてことは私を含め、誰にも分からない。

「……………」
返事はしない。今は誰ともしやべりたい気分ではなかった。

「帰りましょう！携帯鳴りっぱなしですよ！？」

天ちゃんが手に持っている携帯は、私のもの。着信音が鳴り続けていることに気付かなかった。

「…これからどうするんです…………？」

「……………」

再び返事をしない。

天ちゃんは、はぁー、と長い溜息をつき、落ち着いた口調で話し始めた。

「どついつつもりですか。あなたが逃げたって何も解決しないんですよ」

意表を突かれる言葉に、私は噴き出しそうになった。だが、私もいやらしい人間ではない。相手を馬鹿にすることは嫌いだ。代わりに口元がほころぶ。

「先輩のことはとても尊敬していました。真面目で、誰にでも優しい先輩が。今だってそうです。」

それ以上聞きたくなかった。説教など、勘違いでされたくない。

「…でも、今の先輩は」

「…それ以上何も言うな」

長い間水分を取っていなかったたので声がかすれる。幸い、天ちゃんには声が届いたようで、それ以上は何も言ってこなかった。ゴホン、と軽く咳払いをして、豆鉄砲を食ったような顔をする後輩に私は続ける。

「お前は勘違いしてるよ…。まったく。せつかちなのは相変わらずだな…」

私は呆れつつ笑った。天ちゃんが何か言いそうになったが、その

言葉を遮るように言う。

「私がそんなことで逃げ出すとでも？第一、逃げるならなんで現場に向かつて行くんだよ」

「あ……」

天ちゃんは天然のようだ。予想以上に。ほんとに『天才高校生イラストレーター』かよ……。

「すみません…早とちりしてしまっ…」

早とちりにも程があるわ！と内心想いつつ、話を続ける。

「まあ…それはどうでもいいんだが…今の状況を教えてくれ」

「はい！自衛隊がテロリストの鎮圧を試みましたが、捕り逃した、とのことですよ」

まったく返事とイラストだけはいい奴だ…。

「死者はおらず、けが人が数名いるようです。現在芝浦ふ頭駅を中心に、テロリストを捜索中のようです」

「そうか…」

小説と同じだ。とすればこの後はしばらく何もなくなる。

「他には？」

「警察から重要参考人として来るように、と電話が…」

重要参考人って…そんな風にする言葉だっけか？しかも私の小説と状況が酷似していることを把握しているとは…恐ろしいな、警察。まあ、逆らう理由もないが。

「よし…わかった。とりあえず今から一旦家に帰ろう…疲れた」

久々のマラソンは体に毒だ。

「わかりました。警察と野村さんには、僕が伝えておきます」

「すまん…」

「お安いご用ですよ」

こういうとき、天ちゃんは頼りになる。ゆっくりと、私たちはビルから出た。

タクシーを呼び、乗り込む。運転手に傘持ってなかったんですか、

などと聞かれ、ええ、まあ…とだけ返した。

車を使えば早いものだ。すぐに家へたどり着いた。

「さて…これからどうしたものか」

とにかく、まずは警察だろう。ことはそれからだと思った。

第一幕(2)(後書き)

いよいよ話が動きましたが、相変わらずの文章力です…。
読みずらいところは勘弁してください…。

また、間違いなどがあれば指摘していただければ幸いです。
次回更新は未定です。ゆっくり更新します…汗

幕間

若人は、誓う。

何があっても鳶村さんを助ける、と。

なんだか大げさな気もするが、非日常に飛び込む覚悟を決めるには、これぐらいがちょうどいい。

これからどんな困難があろうと、しまむらりけん 鳶村利賢、おかもとけんいち 『岡本健一』の助手として、逃げるわけにいかない。

自分の名に恥じない行動をしろ、とは父によく言われた。

この状況下で逃げ出してしまえば、そこまでだ。一生恥じてしま
う。

命の危険は、そのときはまだなかった。しかし、これからはまっ
たくわからない。

だが、命を賭してでも一緒にいたいと思ったのだ。
恋愛感情とは異なる、特別な感情を。

若人は、誓った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0559x/>

小説モンスター

2011年10月25日03時07分発行